



◇委員の紹介◇

**旭化成株式会社 上席理事 経理・財務部
プリンシパルエキスパート**

佐藤 要造

初めまして、旭化成の佐藤と申します。この度の企業会計基準委員就任に際して、簡単ではございますが、自己紹介と抱負を述べさせていただきます。

私は、1986年に旭化成に入社以来、基本的には、コーポレートの会計・税務領域でキャリアを積んで参りました。その間に会計ビッグバンと言われる会計・税務分野の大変革を経験し、会計・税務事項が、正に、企業経営に於ける重要事項となる変化を体感しました。そのような重要な会計基準の設定団体であるASBJの一員となるということですので、大いに、遣り甲斐を感じるとともに、ややプレッシャーも感じており、文字通り、身の引き締まる思いでございます。特に、私自身は、これまで企業実務一筋でのキャリア形成をしてきた為、学術的な深みや視座の高さに欠ける部分もあろうかと思えます。足りない部分に関しては、今後の自己研鑽により補う一方で、バックグラウンドの異なる各々の委員が、多面的な視点から意見を出し合い建設的な議論を行うという視点も大切だと考えますので、その意味から、少しでも、より良い意思決定に貢献できればと考えております。

私の出身母体である旭化成は、近年、大手製造業では少数派となりつつある日本基準適用企業となります。当社が、日本基準に拘る理由は、大きく2点あります。まず、1点目は、のれんの取り扱いとなります。当社では、のれんも無形固定資産の1つである限りは、経年減価していくと考えており、償却処理を支持しております。2点目は、IFRS適用の場合には、昨今の営業利益の定義に関する議論に見られる様に、IASBによる欧米主導型の決定に振り回され、対応に苦慮する懸念があるという点となります。

なお、財務諸表の利用者にとっても、作成者にとっても、会計基準は、世界的に統一されることが、望ましいことはいうまでもありませんので、今後のASBJでの基準審議に際しては、国際的に齟齬の無い基準作りを意識していくことが、これまで同様、非常に重要であると考えます。その一方で、日本独特のビジネスモデルや商慣習等については、日本独自の会計処理適用の余地を残す等での配慮を行うことや、日本基準の方が正しいと思われる場合には、世界に向けての意見発信を続けることで、日本の主張を通すことが、ASBJの存在意義かと考えます。これらのASBJのミッション達成に向けて、財務諸表作成者としての意見発信を積極的に行うこと等を通して、微力ながら、貢献していく所存ですので、宜しくお願い申し上げます。